



TITLE:

本年八月の天象

AUTHOR(S):

CITATION:

本年八月の天象. 星 1930, 6: 19-23

ISSUE DATE:

1930-07-25

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/169024>

RIGHT:

本年八月の天象

太 陽

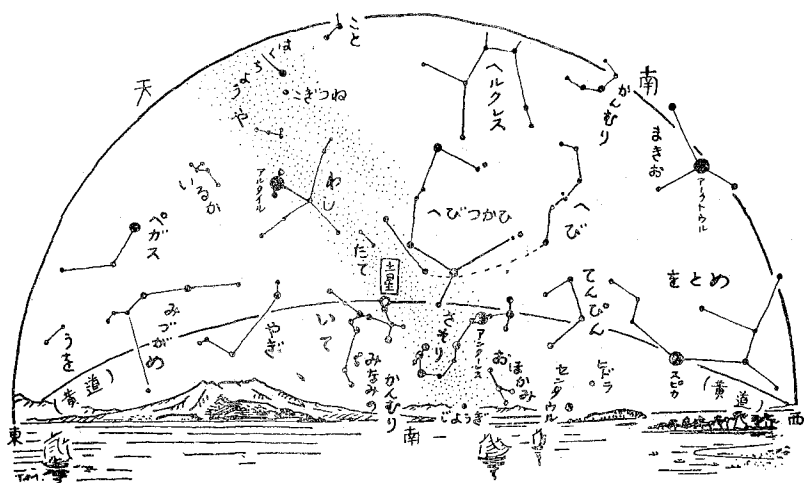
日	赤 經	赤 緯	視直徑	星 座
1	8時43分43秒	北18度 9分	31分34秒	か に
11	9時22分 5秒	15度25分	31分37秒	し し
21	9時59分32秒	12度17分	31分40秒	し し
31	10時36分12秒	8度49分	31分45秒	し し

月始めは獅子宮に在るが、23日からは處女宮に侵入する。

月

月の相	時 刻	直徑視	星 座
上 弦	1日午後 9時26分24秒	31分15秒	をとめ
満 月	9日午後 7時57分36秒	29分24秒	や ぎ
下 弦	17日午後 8時30分36秒	31分 7秒	ひつじ
新 月	24日午後 0時36分54秒	33分26秒	し し
上 弦	31日午前 8時56分42秒	30分38秒	へびつかひ
遠地點通過	10日午前 4時 0分	29分22秒	や ぎ
近地點通過	24日午前 4時48分	33分26秒	し し

今月の月が遊星を歴訪するのでは、先づ最初が、6日午前11時に土星に追ひ付いて、其の南側 5度の所を通り過るのから始まり、次いで14日午後 6時に天王星に追ひ付いて、此れを掩蔽する。併し惜しい事に月入後であるので日本からは見る事が出来ない。20日午前 3時には火星と出合つて、その北側 4度の所を通り、21日午前 7時には木星に追ひ付いて、その北側 5度の所を通過する。更に24日午後 3時には海王星と出合つて、北側 4度の所を通り過ぎ、26日午前 8時には水星を追ひ越して、北側を通る。最後に、27日午後 6時に金星と出合つて、その北側 2度の所を通つて、本月の遊星歴訪を終る。



八月の遊星界

水星 順行を續けて宵の西空に輝き、5日夜に海王星の北側僅かに18分(角)の所を通る。更らに進んで、25日には東方最大離角27度となる。此れは今年中で最も大きい離角であり、氣候もよく、且つ宵であるので是非觀望されん事を望む。位置は「をとめ」座の西端。光度零等。視直徑は7秒(角)。

金星 宵の西空に負4等足らずの明星として輝やく。月始めは獅子座東端にあり、順行を續けて月末には「をとめ」座主星スピカに近寄る。視直徑は月始め16秒、月末21秒。望遠鏡で見れば半月型に見える。次第に太陽と離れて觀望の都合はよい。

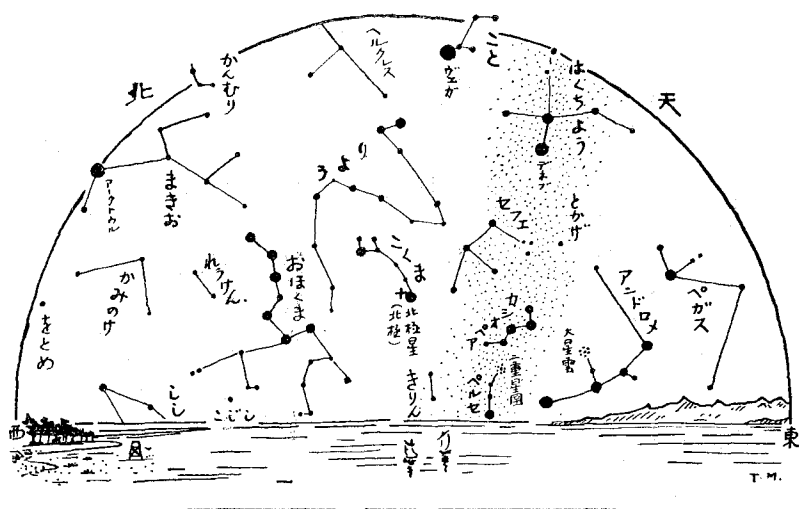
火星 夜半出現。「うし」座アルデバランより順行を續け「ふたご」座の西端にまで進む。光度約1等。視直徑6秒弱。

木星 曉の星。午前3時頃東に登る「かに」座の中央を順行し、光度1等半、視直徑13秒。以後次第に早く登る様になる。

土星 宵に東天にあり。觀望の好期、「いて」の中央に正零等として輝やく。視直徑は16秒。

天王星 夜半前の出現。「うを」座中央にあり。視直徑3秒半、光度6等。

海王星 27日に太陽と合 故に觀望は全く不可能。



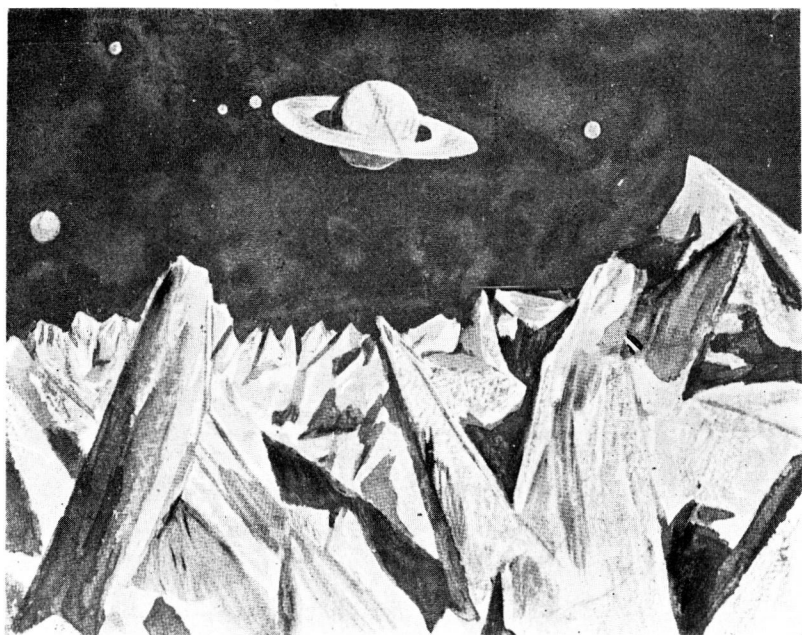
八月の恒星界

蚊遣り煙ぶる涼み臺で、團扇を使ひながら、星を愛つるのも、亦た楽しみなものである。

日没後の天頂には七夕の織姫が純白の明るい光を放ち、天の河を越えて對岸には、牽牛星が輝いてゐる。南天には「いて」座の不思議な姿が、西に向つて逃げて行く「さそり」を追ふてゐる。其れと入れ交つて、東からは「やぎ」「みづがめ」「ペガス」等が登つて来る。北天の北極星の上部には「りゆう」座が全身を現はし、其の西には「おほくま」、東には「カシオペア」の形が著しい。

夏の天は凡ての人を星に誘ふものであり、従つて、此等、夏の星座は、世界の何處の國に行つても、一般社會人が親しみを持つてゐる。特に天の川の壯麗な姿は他の何物にも例へ難い。「セフェ」座から「はくちよう」座あたりはの銀河の深みを見せ、「へびつかひ」座から「いて」にかけては、複雑な銀河系の中心を示してゐるものである。若し誰か、小型望遠鏡でも、此の天の部分に向けたならば、必づ、星雲や星團を無數に發見するであらう。

今が見頃の土星の世界

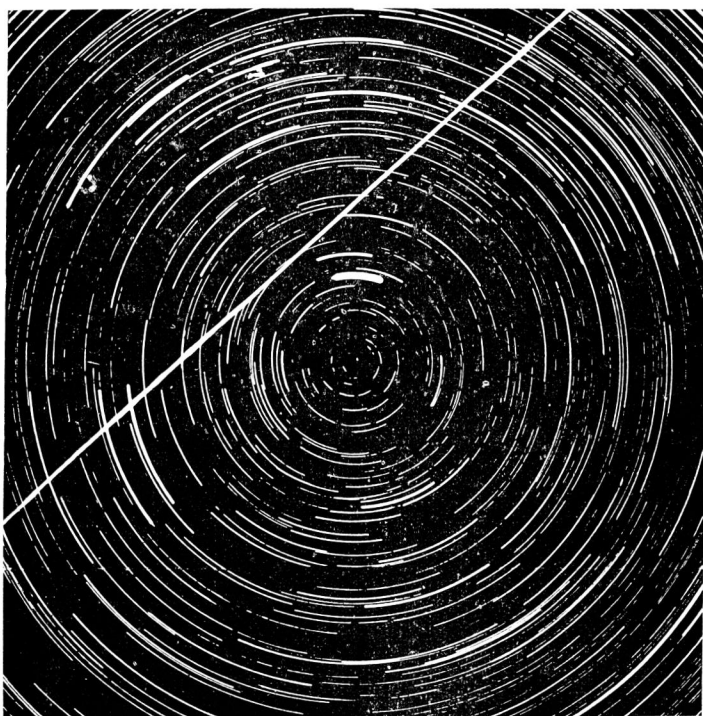


去る七月一日に對衝を過ぎた土星ではあるが、吾々の便利から言へば、八月には、毎日日没後、すぐ南中するので、最も都合が好い。五十倍以上の望遠鏡の持ち主は、此の機を逸せず、此の星の珍らしい姿を見るべきである。僅か三十倍ぐらゐの望遠鏡でも、昔しがリレオが之れを見たときのやうに、耳がある星のやうな形に見えるものである。

こゝに、掲げた寫眞は、土星の一衛星から土星を振り返つて見た景色を畫家が畫いたものである、勿論、想像の畫であるから、決して理學的に之れが正しいとは保證されない。しかし、さすがに一種の興味が無いではない。

土星は今十個の衛星が知られてゐる。最も大きいチタン星でさへ我が月の半ばぐらゐの直徑しかない、他は何れも直徑一千キロ又は其れ以下で、最も小さいのは徑百キロ未滿ぐらゐであらう。こんな微小な天體だから自體の重力は小さくて、表面をまん丸くする力もなく、恐らく此の寫眞のやうに、言はゞ針の山のやうに峻しい面だらうといふ想像を、畫家は持つたものらしい。

八月と流星の出現



八月は流星の月である、一年中で、此の八月ほど多くの流星が見える月はない。殊に又、此の八月は、總ての人が、可なり夜更けまで、涼みながら空に親しむ時であるから、流星は八月の天空に最も相應しい景色とも言へやう。

八月は、大てい毎夜、五分間に一つか、三分間に一つぐらゐの割合で流星が飛ぶ、之れを一々見て、其の時刻、其の天空位置、其の色、其の光度、其の速さ、等、いろいろ氣のつくことを記録すれば、宇宙の神秘を語る材料を得るわけであつて、初心の者にも、八月は流星觀測を練習する好時期である。

八月中旬、殊に八月十日から十二三日頃までは、毎日午前二時から三時までの間、東天のペルセ座の中央部から盛んな流星雨が現はれる。數は、時によると、一分間に一つ位、或は其れ以上、光輝は中々大きく、一等星以上のものも決して少くない。色は白、速さも速い。

八月の流星は昔しから多くの人々に見られ、従つて一般に多くの迷信の種をまいてゐる。